Twinkle 東京女子医科大学学術リポジトリ
Tokyo Women's Medical University - Information & Knowledge Database
https://twinkle.repo.nii.ac.jp

(会長講演)ナイチンゲール看護論再考:自然・人間・看護

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-02-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 守屋, 治代 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.20780/00032073

東京女子医科大学看護学会第 13 回学術集会　会長講演

ナイチンゲール看護論再考：自然・人間・看護

守屋　治代（東京女子医科大学看護学部　教授）

F. ナイチンゲール（1820-1910）は、単に近代看護の創始者であるにとどまらず、公衆衛生改革・病院改革・軍の衛生改革・インド植民地政策等の保健医療福祉の改革者、統計学者、ラディカルな宗教哲学者、女性解放運動家など、思想家・理論家・改革者として、多彩な能力を発揮しました。約150年前に、当時の最高レベルの学問を身につけ、社会階級による格差を目の当たりにし、かつ、宗教紛争・政治紛争・戦争の真只中に身を置いたナイチンゲールが、看護 nursing を指して、「新しい art であり新しい science でもあるものが創造されてきた」と述べた真意を、今、改めて検討してみたいと思います。

以下に、ナイチンゲール看護論の主要概念の一部を挙げてみます。

・病気とは、健康を妨げている条件を除去しようとする自然の働きである。それは癒そうとする自然の試みである。（1893）
・癒すのは自然のみである。看護がなすべきこと、それは自然が患者にはたらきかけるに最も良い状態に患者をおくことである。（1860）
・看護とは、生命力の消耗を最小限にするよう、すべてを整えることである。（1860）
・健康を守る看護は、健康な人の生命力をできるだけ高めるように、自然の力を適切に活用することを意味する。（1893）

本講演では、これらの言葉を、ナイチンゲールの宗教観・自然観にまで遡り、まず、ナイチンゲールが「自然と人間と看護」の関係のなかで、人間の業（わざ）である看護をどのように位置づけたのかを考えてみたいと思います。ナイチンゲール（1860）は、「あらゆる生き物の全ての生命の現実において、（神の）愛と叡智と力のすべてを検証すること、見極めること」が、人間の「本当の仕事」だといい、看護を主導する原理を“Nature（根源的自然、働きとしての生命）”においています。

一方で、ナイチンゲール（1893）は、看護の仕事を「“calling”ではなく“profession”にすること」および「“calling”と“election”を確かなものにしないこと」を危険だと警告し、さらに、「この世の中に看護ほど、自分自身はけっして感じたことのない他人の感情のただなかへ自己を投入する能力をこれほど必要とする仕事は、ほかに存在しない」（1860）と他者理解の極致を看護者に求めてもいます。

このように、ナイチンゲールにとって、看護とは、単なる健康の回復・予防・増進を超えてその向こうに、自分が関わる理解し尽せない他者の生の修復・再生までを射程に入れる奥行きをもったものでした。ここまでの意味を込めて、ナイチンゲールがいう「新しい art であり新しい science」としての看護の核心を追い求めてみたいと思います。